

伊参スタジオ映画祭専用応募用紙 (A4 サイズ 20 字×20 行)

あらすじ(400字以内)

中学教師の菅谷涼子(35)は仕事に絞殺されるある日から突然動きを止めて棒立ちになる人々を目撃するようになる。初めは恐怖を感じていた涼子だが徐々に止まった人々に對する怒りを覚えるようになり、やがて自身の顧問を務める水泳部でも棒立ちになる生徒が出たことで保護責任を追及され、その日の夜、涼子は深夜の繁華街で目撃した棒立ちの男を、衝動的に撲殺し、自らもまた棒立ち人間になってしまった。

棒立ち人間はそれから様々な場所に現れ、その数は日に日に増しているようだった。人類全体がやがて動きを止め、滅亡することを予感させるかのように、夕陽が沈む。

登場人物表

菅谷涼子 (女・35)	中学数学教師
野々村恭平 (男・45)	涼子の同僚の英語教師
永島 (男・38)	涼子の同僚の学年主任
小野田 (女・29)	涼子の同僚の国語教師
深沢 (男・60)	涼子の勤務する中学の教頭
明石 (女・64)	涼子の勤務する中学の校長
村田恵 (女・40)	引きこもりの生徒の母親

本文

○電車の駅・ホーム(朝)

通勤ラッシュの時間帯。電車がホームに入ってきて停車すると、通勤の人々が雪崩のように下りてくる。その中の一人の男が改札に向かう人波の中で徐々に歩調を緩め、やがて立ち止まる。他の通勤の人々はそれを迷惑そうに眺めながら改札の外へと消えていく。男は立ち止まったまま動かない。

○タイトル

○中学校・教室(夕)

数学教師の菅谷涼子(35)とその教え子・村田光(15)の母親・村田恵(40)が面談している。三者面談のため恵の横には席がもう一つあるが、光は来ていない。

恵「すいません」

涼子「いえいえ」

涼子、空の席に目をやる。

涼子「定時や通信もありますし、今はリースクールもありますから、ご心配なさらずに、ね、ゆっくり考えて、光くんの意志を尊重して、進路についてはとにかく心配ありませんから」

涼子、定時制や通信制高校、リースクールのパンフレットをまとめたクリアファイルを恵に渡す。

それから何気なく廊下の方に視線を移すと、そこに二人の男子生徒と思われる人影が、ドアの磨りガラス越しに見える。

廊下からひそひそ声やくすくす笑いがかすかに聞こえてくる。涼子、立ち上がってドアに近づき、開けると、廊下にいた二人の男子生徒が笑いながら一目散に廊下を駆け出す。

その後ろ姿を不快そうに眺める涼子。

涼子「廊下は走らない！」

伊参スタジオ映画祭専用応募用紙 (A4 サイズ 30 字×30 行)

○同・職員室(夜)

三者面談の記録をパソコンに打ち込んでいる涼子。

女の声「えマジ話ですか!？」

仕事を投げ出した若い女性国語教師・小野田(29)と学年主任の男性教師・永島(38)が話している。

永島「いやリアルかどうかはわかんないよ? 俺はそう思うって話」

小野田「え信じらんない。キモ」

永島「あそういうのダメ?」

小野田「え、逆に永島先生はアリなんですか?」

永島「ないない。俺そういうの真面目だもん。風俗だって行かない

よ」

答えに窮す小野田。

永島「え、そこで引く? いや行かないって話だから」

小野田「え、ああいうのって、いくらぐらいするんですか?」

永島「(笑)だから行かねっつってんだろ」

二人の談笑は続く。涼子は二人には目もくれず、無心で仕事を続けている。

涼子の向かいのデスクに座ってポーツとモニターを眺めている男性英語教師・野々村(45)、ふと涼子を見て、

野々村「菅谷先生、大丈夫ですか?」

涼子は仕事の手を止めずに、

涼子「何がですか?」

野々村「このあいだも泊まりでしょ?」

涼子「ああ、もう、帰る方が面倒くさいんで」

野々村「もたないですよ、そんなんだと」

涼子「ですかねえ」

野々村「ペットとか飼ったらいいんじゃないですか?」

涼子「はあ」

野々村「ブタとかさ」

野々村、くつくくと笑い出す。

野々村「いや俺ブタずつと飼いたいんですよ。ほら、子供の教育にもいいでしょ？ でもそれ話すと奥さんがえーやだよー！
ってすごい拒絶反応で」

野々村、一人で可笑しそうに笑っている。

涼子もつられて、少しだけ笑う。

○電車内（夜・移動中）

終電の車内。涼子はずり革に掴まり、立って眠っている。

○駅の出口（夜）

涼子が外に出てくると、シャッターを閉めるために待っていた駅員がシャッターを下ろす。

○住宅街（夜）

ひとけのない住宅街を一人でスマホを見ながら歩いている涼子。

ふとスマホから顔を上げると、前方数メートル先にスーツ姿の男がボーツと立っているのが見える。

立ち止まり、男を眺める涼子。しばらくそうしているが、男は微動だにしない。

涼子、振り返って後ろを見る。誰の姿も見当たらない。再び男に視線を戻す。

涼子の表情に緊張の色が浮かぶ。
手にしていたスマホ画面を見るとSNSの画面。涼子はそれを

を耳元へ持っていくと、電話で話すふりをしながら男の方へ歩き出す。

涼子「あ、もしもし？ うんもうすぐ帰る。え？ 買ってないよそんなの。今だってもうすぐそこまで来てるもん。……自分で買
いに行け。コンビニ売ってないんじゃない？」

伊参スタジオ映画祭専用応募用紙 (A4 サイズ 30 字×30 行)

涼子、電話をするふりをしながら、男の脇を通り過ぎる。
男は微動だにしない。

○マンション・エントランス（夜）

涼子、電話をするふりはもうやめて、早足で入ってくると、後ろを注視しながらロックを解除して、マンションの共用部へ入る。
エレベーターのボタンを押して、エレベーターが来る間、ずっと外を見ているが、誰の姿もない。
やがて、エレベーターが来ると、涼子はそれに乗り込み、ドアを閉める。

○中学校・外観（朝）

○同・職員室（朝）

涼子がデスクで授業準備をしている。
何気なく向かいのデスクに目をやると、野々村はまだ出勤していない様子。
神妙な表情を浮かべた教頭の深沢（60）がつかつかと部屋に入ってきて、永島を見つけると、歩み寄って小声で何か話す。

永島「ええ？」

深沢「いや、まだ詳しいことはあれだから。ちよつと、とりあえず、振り分けだけ」

不穏な様子の二人を眺める涼子。

永島「わかりました」

深沢、どこか疲れた足取りで部屋を出て行く。

涼子は視線を手元に戻して準備に戻る。

永島、頭をかきながら涼子のデスクまでやってくる。

永島「菅谷先生、非常に申し訳ないんですけど、野々村先生のテスト

伊参スタジオ映画祭専用応募用紙 (A4 サイズ 30 字×30 行)

採点代わりにやってくれないかな」

涼子「どうしたんですか」

永島、涼子に耳打ちする。

永島「飛び降りたって」

永島を見る涼子。

永島「あ、聞かないで。俺もよくわかんないから。生徒には言わないで。とにかくお願いします」

小野田が永島に近づいてくる。

小野田「えどうしたんですか？」

永島「いや野々村先生がさあ」

○同・外観（夜）

○同・職員室（夜）

涼子が一人残って英語テストの添削をしている。その手つきは鈍く、やがて答案用紙に描く○がぐにやりと曲がる。

眠りかけていた涼子、そこで目を覚ます。壁掛け時計を見る夜の12時近い。

苛立たしげにため息をつきながら、残りの答案用紙をファイルにまとめ、慌ただしくリュックに突っ込む涼子。

○マンション・涼子の部屋（夜）

玄関の鍵を開けて、涼子が部屋に入ってくる。

電気をつけ、リュックをソファに放り、冷蔵庫を開けると、中からペットボトルの水を取り出そうと握る。

が、その手を離すと、涼子は横に並んでいる発泡酒の缶を握り直す。

缶を開けて酒を流し込む涼子。飲みながら、ベランダに向かう。

夜の街を眺めながら酒をあおる。

と、視線を下にやると、長い髪の女がマンション近くの歩道に立ち尽くしているのが見える。
涼子はしばらくその姿を眺めているが、長い髪の女は微動だにしない。
涼子、気味悪そうに室内に戻っていく。

○歩道橋（夜）

仕事帰りの野々村が階段を上がってきて歩道橋を渡る。
その途中、なんの躊躇いも前触れもなく、ただ当たり前のことのように、野々村は歩道橋の欄干を乗り越えて飛び降りる。
車の急ブレーキの音とぐしゃつという衝突音。

○同・涼子の部屋（朝）

その夢を見ていた涼子が顔を伏していたテーブルからビクツとして顔を上げる。
テーブルには採点済みのテスト用紙の束。前夜、採点しながら涼子は眠ってしまった。
化粧は剥がれ目の下に濃いクマを作った涼子はテスト用紙を眺める。それからスマホを見て、慌ててテスト用紙をリュックに詰め込む。

涼子「クソ！」

○バス停（朝）

時刻表を見て悪態を吐く涼子。
バスの来る方に目をやるとタクシーが向かってくるのが見える。
バス停の横に出てタクシーを停めるため手を上げる涼子。

○タクシー車内（朝・移動中）

学校に電話をしている涼子。

涼子「今、タクシーで向かってまして。一時限までには間に合うと思いますので。はい、大丈夫です。大丈夫です」

赤信号でタクシーが停まる。

涼子「あとすいません野々村先生の告別式、日取りもう出てます？」
突然のクラクション。

涼子、驚いて前を見ると、横断歩道の途中で買い物帰りと見られる中年女性が棒立ちになっている。車道の信号は青。クラクションが聞こえていないのか、中年女性は微動だにしない。

運転手「なにやってんだよおばさん……」

○中学校・教室

教壇に立ってポーツと教室の後方を眺めている涼子。

今は授業中。

生徒1「え、それで、なんすか？」

涼子「え？」

生徒1「ああ、いいっすいいっす。大丈夫っす。どうせ習ってもテスト以外で使わないし」

クラスメートたちが軽く笑う。

涼子「そんなことはないよー。微分積分もわかんなかったら将来負け組だよ」

生徒1「えなんすかそれ」

生徒2「高校数学でしょ」

涼子、黒板に書いてある数式を消して、ネイピア数を書き始める。

涼子「数学は抽象を扱う。抽象は動的な現実世界を静的に把握するための方法ね。でもそうすると現実そのものからは切り離されてしまう。なぜなら現実には常に動いている、つまり動的であるということだから。微分積分で用いるネイピア数のような超越数は動的な現実を……」

涼子、ネイピア数を十数桁ほど書いたところで書く手を止める。

涼子「この先なんだっけ？」

○同・校庭（夕）

水泳部の生徒たちが校庭のトラックでマラソンをしている。顧問の涼子はストップウォッチとボードを手にその光景を、上の空で眺めている。

涼子「はいあと5周ねー」

と、水泳部員の一人が突然立ち止まる。その横を一人の部員が怪訝な顔で通り過ぎる。

涼子、棒立ちになった部員を見つめる。

また別の部員は通り過ぎず、走るのをやめて、棒立ちになった部員に話しかける。

水泳部員1「どうした？ 大丈夫？」

棒立ちの部員は何も喋らず、微動だにしない。

水泳部員1「おい。聞こえてますかー」

他の部員たちも走るのをやめて、棒立ちの部員を見る。

涼子、棒立ちの部員に向かって歩き出し、その足は次第に早くなっていく。

涼子「（来て）どうしたの。ねえ。ん？」

涼子、棒立ちの部員の肩を軽く揺さぶる。

涼子「ねえ、なんか言いなよ。どした？ なに？ ねえ。ねえって」

涼子はますます強く肩を揺さぶるが、棒立ちの部員は何の反応も示さず立ち続けている。

○同・校長室（夜）

ソファーに座った涼子が顔を両手で覆っている。その向かいには校長の明石（64）と教頭の深沢が座っている。

深沢、軽く笑いながら、

深沢 「まあ、一時的なショック状態かもしれないって医者の方も言
ってるらしいから」

涼子、顔を上げて、

涼子 「私なにもしてませんよ」

深沢 「そう……ですねぇ」

明石 「何もしないのに、人が突然あんな風になりますか？ ご両親

はそう言ってますよ。私の意見じゃない」

深沢 「菅谷先生、いろいろ言いたいこともあるだろうけど、差し当

たってね、何が起こったか見解を共有しておきたいんです。そ

の方がほら、警察に話す時にもいいじゃない」

涼子 「なんですか警察って」

深沢 「あれ、電話行っていない？ いい加減だな警察も」

深沢、引きつり気味に笑う。

涼子、茫然自失の表情。

深沢、険しい表情で責めるように涼子を見ている。

○繁華街（夜）

深夜のひとけのない繁華街を酔っぱらった涼子は一人でふら
ふらと歩いている。

やがて、倒れるように店のシャッターに寄りかかるとすすり

泣き始める。

スマホを取り出し、震える手で母親に電話をかける。が、留

守番電話で母親は出ない。

涼子 「お母さん、出てよ」

涙を拭って、前を見る涼子。すると数メートル先に、サラリ

ーマンらしき男が後ろ向きで棒立ちになっているのが見える。

しばらく固まって男の背中を眺めている涼子。

やがて涼子は、呼吸を荒げ、表情に怒りを浮かべて、男に向

かって歩き出す。

男の横を通り、正面にまわると、その顔を睨みつける。男の

顔は無表情で、目は虚空を見つめている。

涼子「お前らなんなんだよ」

男の反応はない。

涼子「なんなんだよ！」

手に持っていたスマホで男の側頭を殴る涼子。男は倒れ、殴った拍子にスマホはどこかへ飛んでいく。

倒れても男の目は開いたままで、その間はいま涼子を見つめている。

涼子、激高した様子で咄嗟に路傍に落ちていたコンクリート片を拾うと、男の頭を何度も何度も殴りつける。涼子の顔と服が返り血に染まっていく。

しばらくして涼子は我に返り、コンクリート片を手放すと、立ち上がって男の死体を見下ろす。涼子はその場に棒立ちになっ、動かなくなる。

○駅前

何人もの人が棒立ちになっている。通行人たちはそれを怪訝な顔で眺めながら通り過ぎていく。

○スーパー・レジ前

レジに並んだ人が棒立ちになっており、その後ろに長蛇の列ができていく。

○海岸（夕）

海岸で遊んでいたと思われる若者たちが棒立ちになって、その足元は潮が満ち始めて見ずに埋もれかけている。

○夕陽が沈む

(了)

伊参スタジオ映画祭専用応募用紙 (A4 サイズ 30 字×30 行)

伊参スタジオ映画祭専用応募用紙 (A4 サイズ 30 字×30 行)